

東日本大震災

職場の仲間と住民を守る



全日本自治団体労働組合
北海道本部
〒060-0806 札幌市北区
北6西7北海道自治労会館
電話 011-747-3211
FAX 011-700-2053
編集・発行 谷川 広美

3カ月間の復興支援終わる

4月10日から始まった自治労の東日本大震災復興支援活動は、7月10日、北海道第13グループの6人の活動を最後に、3カ月間の日程を終えた。被災地の復旧・復興にむけ、自治労総体として77000人、そのうち北海道本部は、岩手県・宮古市と山田町に総勢1500人を派遣した。(関連記事2面)

3月11日の東日本大震災直後の12日、自治労本部は、できるかぎり可能な支援を行うため災害対策本部を設置し「災害特別カンパ」1人10000円を取り組んだ。さらに、3月30日に決定した「自治労復興支援活動計画」に基づき、東北3県(岩手県、宮城県、福島県)に組合員を派遣することを決定した。また、6月から人数を縮小し7月10日まで延長を決めた。北海道本部は4月10日、第1G15人が岩手県に出発。第9Gから6人に縮小して派遣し総勢1500人が復旧・復興をめざした。文字通り自治労



最終第13グループの6人の合言葉は「絆」。宮古市の道の駅などで販売している「絆 | WATE」のTシャツをおそろいで着た=7月10日、岩手県宮古市BC「ホテル沢田屋」前で

日本はこれからどうなるのだろうか。福島第一原発から出る放射性物質に、汚染水、空気、水、食べ物全般の汚染はもはや避けられない。流通段階でどれだけチェックができるのか、どこまでい止められるのか、人間は生きていけるのか。

朝風

水力12円、火力11円、原子力5円で1kwと、まことしやかに流れる情報。何が根拠かわからない。原発事故の処理や賠償金、廃炉後永遠のメンテナンス、「原発は必要」の宣伝費etc.どう考えてもそんなに安くはないぞうだ。

の総力をあげて、自治体職場に働く仲間と住民を守るために活動した。

きの支援をお願いします。★これまでの支援活動報告は、道本部ホームページに掲載しています。

◆3カ月に及ぶ長期間にわたって協力をいただいた地方本部・単組・総支部、現地に赴いていただいた組合員の皆さま、留守の間支えていただいた職場やご家族の皆さま、ありがとうございます。ご協力に心から感謝申し上げます。震災から4ヵ月、復旧、復興は道なればです。寒かった被災地も今では、連日の猛暑の中で被災者が過酷しています。今後も引き続き

今年も全道で走ります



今年も、反核平和の火リレーが、7月19日幌延町をスタートした。福島第一原発の事故を受け、これまで以上に「核のない平和な社会の実現」を訴えようと、8月6日まで道内179市町村を走り繋ぐ。各地域で事前の学習、小旗やポスター作成、新聞社への取材依頼など工夫した取り組みを展開して住民にアピールする。成功に向け、各市町村の集會参加、ランナーへの応援をお願いします！(下記参照)

7月19日延幌をスタート

自治労 公企評 組織集會

アイデア出し合い解決!

7月7日、8日の両日自治労公企評組織集會が札幌市で開かれた。会場は自治労会館に全国から

101単組、1700人(うち北海道18)が参加した。吉田議長札幌市職

連は、「東日本大震災でライフライン(水道、下水道、ガス)に甚大な被害を及ぼし、特に福島島の被害は深刻だ。現地報告の中で、ライフラインの復旧と原子力エネルギー



政策に問題が投げかけられている」とあいさつし本集會での積極的な意見交換を求めた。続いて、開催地を代表して道本部山上委員長、札幌市職連吉田委員長が歓迎のあいさつをした。記念講演では、元フグビー日本代表の今泉清さんが「活力ある組織とは」をテーマに講演した。今泉さんは「ラケビ1では『みんなは1人」のために、1人はみんな

のために」と全員が目標に取り組み解決するとう考え方があられるのは、皆さんの組織と同じ。その中で自分は何ができるのか?アイデアを出し合っ解決することが大事」と述べ、「目標を見定めなければつかめない勝利がある」と強調した。特別報告として、宮城県・福島県・兵庫県本部公企評から、下水道の被害状況、警戒区域内の工業用水(福島原発等)の確保と課題、給水支援活動と事前協議について報告した。



自治労 第83回定期大会
長野県大会
2011年8月24日(金)～26日(日) 長野市ビッグハット

JICHIRO スケジュール

7月	
23日(出)	第33回全道自治体職員等女子バレーボール選手権優勝大会(～24日、深川市)
26日(火)	自治労共済臨時総代会(東京)
29日(金)	第32回全国保育集會(～31日、富山市)
31日(日)	被爆66周年原水禁世界大会・福島大会(福島市) 矢別移転実弾演習に反対する全道集會(釧路市)
8月	
1日(月)	第23回道本部執行委員会(札幌市) 第5回組織強化委員会(札幌市) 第5回男女がともに担う北海道推進委員会

道本部ホームページ
自治労北海道 検索 ユーザー名:hokkaido
組合員専用ページは パスワード:jichi2009

第24回 反核平和の火リレー

期間 7月19日(火)～8月6日(土)

Aコース	Bコース	Cコース
幌延→奈井江 浦臼→奥尻 上ノ国→札幌	利尻富士→和寒 上川→えりも 北広島→札幌	津別→北見 別海→釧路 浦幌→帯広

札幌市・大通4丁目集ろう! 詳しい日程はHPで!
8月6日(土) 12:00開始予定 **札幌到着集會**

東日本大震災復興支援報告(第10〜13グループ)

絆〜3カ月間の復興支援

4月10日から始まった東日本大震災自治労の復興支援活動は、7月10日で最終日を迎えた。道本部として3カ月間で総勢1500人を岩手に派遣した。今回は第10Gから最終第13Gまでを報告する。

■本物の「じちろうさん」
10Gは、大震災から3カ月の6月11日に宮古市に入った。9Gからはじまった山田町宮古市から約30km南の役場での行政支援と役場閉庁日の、宮古市内避難所の支援業

務が主な内容。目まぐるしく変わる支援内容に、いかに対応し被災者と市や町の職員の負担を軽減できるか、不安を抱えてのスタートとなった。そんな中でも、励みに

のなつこさんと、避難住民の自治労支援団への親近感と期待の高さがあった。これまでの支援業務でしっかりと地元に着いていた。避難所のホワイトボードには支援団交代の土曜日に子どもた

ちが「じちろうさんかえる日(↑)」と書き、避難所の住民から真顔で、「市役所の業務がスムーズに進んでいるのも『自治労さん』が来てくれたからだよ」といわれると、逆に元気をもらった。

また、山田町仮設住宅の駐車場番号札のくい打ち業務では、北海道から来た役場の人のうわさ

が広がり見学のギャラリ―ができて赤面しながらの業務であった。宮古市と山田町ではどうしても災害復旧に差があったが、宮古市内でも、宅地確保が難航する地区の再建など課題は山積

で、復旧・復興への支援は息の長い取り組みが求められる。それを実現してこそ、本物の「じちろうさん」になるのではないだろうか。

(第10G・岡本宜久)
■役に立ちたい思い果す
第11班も引き続き、山田町役場での作業で、土日は避難所任務となった。宮古市の避難所では、1週間20人ほどが、避

難所を出て仮設住宅に引っ越していた。健康福祉課の「義援金交付申請受付事務」は、国や県に対する申請書の確認作業も山を超え、次の作業(弔慰金)に移ることとなった。

建設課の仮設住宅建設が進んでいたが、場所や造りの問題が出ていた。総体的な感想は、参加した一人一人の組合員が、何か役に立ちたいという思いで参加し、その成果は間違いなく果たせたとと思う。一方で、自治労が行ってきた後方支援の趣旨が、受け入れる自治体が見望しているものであったのか疑問が残った。



第10Gの6人

仮設住宅当選者への電話

山田町での事務作業

「ホテル沢田屋」での解散式

『原発のウソ』

著者・小出 裕章

京都大学原子炉実験所 助教
(扶桑社新書740円+税)

「不屈の研究者」が警告する原発の恐怖



読んでみたい BOOK

6月1日に発行してから20日間で17万部も売れた本「原発のウソ」。小出さんは原子力に夢

を持ち研究者になったが、学んで原発の危険性を知り40年間一貫して「危険」と訴えてきた。福島第1原発事故から4カ月経過した今も制御不可能な原発の現実。「起きてしまった過去は変えられないが、未来は変えられる」と訴える。表示を願っている。

多くの人が「未来のエネルギー」と賛成していた時代から、危険性が明らかにになった今、原子力以外のエネルギーを得る選択がある。人間の命や子どもたちの未来の方がずっと大事。「危険な原発はいらぬ」という意志

を排除して廃墟である。山田町は仮設住宅の建設・入居が他の被災自治体より遅れており一刻も早く被災住民の居住地確保が急がれる。また、義援金の第一次配分は、家族死亡や行方不明の場合、一律50万円だが、2次配分以降はその金額が増額される予定だ。生活支援金は、住宅が津波で流された住民へ支給され、さらに、弔慰金や台湾からの義援金など、膨大な量の書類を前に、とにかく短時間で大量になす仕事であった。これらに対応した山田町の職員はわずか1〜2人で、県内の被災を免れた自治体から派遣された職員が9月まで業務をこなす。逆の立場では多分途方に暮れてしまうと感じた。

一生懸命に仕事はしているが、一向に復興が進まないようすを見ると、「いつまで頑張れば良いのか」という気持ちに職員がなっていると思う。少しでも、本来、やるべき仕事に従事していただき、一日も早い山田町の復興を願うばかりである。

(第12G・榎部浩二)
■被災地との絆これからも
最終日7月10日午前9時57分、M7.1の余震と、津波注意報。田老の視察を取りやめ、沢田屋ロビーで自治労支援団の解散式を行った。
現地・岩手県本部の来内委員長は、「全国の皆さんの支援に感謝。自治労全体の支援はこれで終了だが、県本部はさらに1カ月の支援を決定した。この3カ月間の取り組み

忙中余話

4月10日から3カ月間にわたって取り組んできた自治労復興支援活動が第13グループ・7月10日をもって終了した。北海道本部からは実人員で150人の組合員に参加をいただき、担当した岩手県宮古市と山田町で避難所運営や行政事務支援等に活躍していただいた。送り出してくれた真の復興めざして、できることは何かを改めて考えていかなければならぬ震災発生から約3カ月を

自治労の復興支援活動(北海道団)

グループ	派遣期間	人数
第1	4/10 ~ 4/18	15人
第2	4/16 ~ 4/25	15人
第3	4/23 ~ 5/2	15人
第4	4/30 ~ 5/9	15人
第5	5/7 ~ 5/16	15人
第6	5/14 ~ 5/23	15人
第7	5/21 ~ 5/30	15人
第8	5/28 ~ 6/6	15人
第9	6/4 ~ 6/13	6人
第10	6/11 ~ 6/20	6人
第11	6/18 ~ 6/27	6人
第12	6/25 ~ 7/4	6人
第13	7/2 ~ 7/11	6人

ヒロちゃんの国会だより



仲野博子

64

震災後の福島第一原発の処理などの件では、大変ご心配をおかけしていますが、党の農水部門会議の酪農・畜産政策責任者の立場で、政府と一丸となって、できる限りの力を観光にお出かけの方が例年よりも多いようです。これを機会に、北海道の自然豊かな魅力や人情豊かな土地柄を感じていただくとできれば、と考えています。未曾有の国難とも言える災いを転じて福となす発想も今、必要なのではないでしょうか。(7月12日東京にて)

未曾有の国難から発想を転換

尽くしております。

今年は例年と違う厳しい基準の節電対策をいかに効率的に実施するかに知恵を絞っております。こういう時には、北の大地を吹き抜ける爽や

避難所の業務ではその趣旨は十分発揮できるが行政業務では全国の自治体から職員が派遣され一人区としての業務をこなしている。しかし、自治労は後方支援で、支援を

に学び、引き続き被災単組を支えたい」と、感謝と新たな決意を述べた。また、出発前には宮古市職労・伊藤委員長も駆けつけ「ちょうど3月11日も地震で混乱を極めた。皆さんの支援に心から感謝」とあいさつした。

横断幕を手にした沢田屋と宮古市職労の皆さんの熱烈な見送りは、最終グループだからというだけではなく、第1グループからの支援団総体による取り組みや姿勢、地域住民や職員の方々のふれあいなどの積み上げのたまものだ。

この取り組みで得た、道内の参加者や各県の参加者、被災地の職員や住民の方々との「絆」を今後も大事にしたい。(第13G・大島進)